

ルネマリー・カザール著

『雨傘、日傘、ステッキについてのエッセイ』

René-Marie Cazal : Essai historique, anecdotique sur le parapluie, l'ombrelle et la canne et sur leur fabrication
Paris : Typographie Lacrampe et compagnie, 1844. (KEOI/383.4/C)

文化女子大学准教授(ファッション文化論担当) 北方 晴子

本書は、1844年にパリで発刊されたアンブレラ、パラソル、ステッキについてのエッセイ集である。歴史や逸話、素材、製法について書かれたもので、本のサイズは、縦18cm、横12cm、全104ページからなる小型の冊子である。

19世紀は、現代とは比べものにならないほど、身だしなみや服装の規範が厳しかった時代である。当時、装いに関しては、時間や場所に応じた厳しい決まりがあり、それは次第に複雑で多岐にわたるようになる。特に1840～70年代にかけて、その処世術を記した手引書は数多く出版された。それらは、当時の人たちの行動を示してくれる資料として、大変貴重なものである。機会があったら、ぜひご覧いただきたい。

本書の中で著者は、傘やステッキについて、古代ギリシア、ローマ時代から中国、日本も含む歴史について触れている。そして、素材や製造方法にまで記述はわたっている。

そもそも、ステッキの歴史は大変古く、古代社会では高貴な身分の人たちに持たれていた。古代エジプトにおいては、持ち手に装飾が施されたステッキが発掘されている。ギリシア神話の中でも杖を持った神が描かれている。そして中世に入ると、聖職者が携え、身分や権力を象徴した。その後、主にステッキは男性用として、16世紀に登場する。服飾史の文献に登場するのもその頃である。

アクセサリーとして流行するのは、17世紀である。剣が左の腰に吊り下げられていたためであろうか、ステッキは通常右手で持たれ、そうすることで当時の完璧な紳士像が完成した。¹⁾ 房飾りをあしらった当時主流のステッキは、おおよそ長さは2

フィートから3フィート(約61cmから91cm)で製作された。

ルイ14世の時代には、男性モードにおいての不可欠な装飾品となっていく。ルイ14世(Louis XIV, 1638–1715)は、ステッキを持たずに公の場には現れなかったといわれている。彼はとりわけ高価に装飾されたステッキを好んだ。象牙や黒檀を使い、持ち手には、琥珀、ルビー、トルコ石、ダイヤモンドがあしらわれた。

同じ頃のイギリスでも、先端に金や象牙のついたものが持たれた。イギリス国王チャールズ1世(Charles I, 1600–1649)は多くの肖像画の中で、ステッキを携えている。

日々の出来事を詳細に綴った『サミュエル・ピープスの日記』の中にも登場する。

「ステッキ屋に入り、散歩用のステッキを一本買った。値段は、4シリング6ペンス(当時、日給がおおよそ1シリング)」(1664年4月)

「ニス塗りのステッキを進呈してくれた。大変立派なもので、持ち歩くにも軽い」(1667年7月)²⁾

18世紀になると、ステッキは男性にとってますます重要な装飾品になっていく。帯剣の禁止令が、ステッキの普及に拍車をかけることとなる。劇作家で服装史家のメルシエ(Mercier, Louis-Sébastien, 1740–1814)は、「ステッキが剣の代わりに用いられるようになったので、人々は細身のステッキを手にも急ぐ。おかげで歩みは軽快になり、それ以上にほんの少し前まではあれほど日常茶飯事であった剣による流血事件はもはやない。法律というより、風俗がこの変化をもたらした」³⁾と述べる。

このように、ステッキは剣の代用品として用いられるようになった。フランスでは18世紀末期、男性がステッキにお金を費やしたために、特に独創的なデザインのものに対しては、課税がされた。また、18世紀には、伝染病を防ぐという理由から、殺菌剤が持ち手の先端に入れられたステッキを医師が持ち歩いた。そして、悪臭がひどかった当時の街では、防臭のために香りの玉を入れた金属製の小さな穴のあいたステッキも登場し、疫病よけとしても持ち歩かれた。

他方、女性のアクセサリとしてもステッキは登場する。記録の上では11世紀に登場するが、いったん姿を消し、再び登場するのは18世紀末期である。女性がステッキを携えた姿は、当時のコスチュームプレートの中にも、たびたび登場する。女性用のステッキの持ち手の部分には、化粧用の鏡や香水瓶、中にはオルゴールが隠されているものもあった。この時代、女性の靴のかかとが高くなり、歩行を支えるためにステッキが必要とされた。当時、医者が女性に運動のひとつとして、散歩を奨励したということもあり、女性にとっては装身具というよりも実用性が高かった。

19世紀はステッキが最も流行し、多様化した。ファッションプレートを見ても、“ダンディ”と呼ばれる男性たちが小粋にステッキを手にしてしている姿が目にとまる。シルクハット、フロックコート、手袋、ス

テッキという姿は、19世紀の男性の典型的なスタイルであった。当時、紳士にとってはステッキを持たずに外出することは無作法であるとも考えられ、その持ち方も重要であった。作家バルザック(Balzac, Honoré de, 1799–1850)は「ステッキの握り方ひとつでその人の精神がわかる」⁴⁾と述べる。

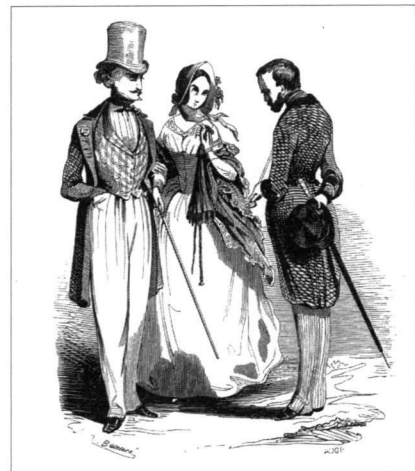
1894年のフランスの新聞では22種類ものステッキの種類を紹介している。⁵⁾ 持ち手にペンやタバコ、双眼鏡、ナイフやフォークなどを備えたものや、ステッキそのものが椅子になるものやキャンバスのイーゼル(掛け台)になるものなど多種多様である。そのため、ステッキの製造業者は様々な種類のステッキを創案しなければならず、そうした評判を聞きつけた製造職人がパリでその製法について学んだ。

ステッキは、20世紀、特に1930年代には衰退し始めた。1930年代は男性モードが簡略化の傾向へと変化した時期で、その影響を免れなかったのだろう。

- 1) フランソワ・ブーシェ著『西洋服装史』文化出版局 1973
- 2) R. C. Latham & W. Matthews (ed.)『The Diary of Samuel Pepys』London, HarperCollins, 1995
- 3) L. S. Mercier『Tableau de Paris』Paris, Mercure de France, 1994
- 4) オノレ・ド・バルザック著 山田登世子訳『風俗のパロジ』新評論 1982
- 5) Max von Boehn『Ornaments』N.Y. Benjamin Blom, 1929



17世紀の男性の装い(本書より)



19世紀の男性とステッキ(本書より)